

## IV 大都市居住高齢者の近隣交際関係

### —北区高齢者調査から—

1. 問題
2. データと分析の方針
3. 分析
4. 結果と考察

江 上 渉\*

#### 要 約

近隣や親族は、高齢者と限らず日常生活上の諸問題を処理・解決していく上で重要な社会的資源である。本稿は、高齢者の近隣や親族との交際を、交際相手の人数、交際の内容、交際頻度などについて調査し、その結果をまとめたものである。調査は東京都北区の2地区において、25年以上住み続けている65歳以上の高齢者を対象に実施したものである。

近隣との交際が活発な地区（集合住宅団地）と親族との交際が活発な地区（既成市街地）といった差が認められた。しかし、共通する大きな発見は、近隣や親族といった地縁・血縁でむすばれた関係でありながら、それが友人との交際と質的に似たものになっているということである。つまり、交際の相手が主体的に選択されているのである。選択された交際相手と活発な、多岐な内容にわたる交際がおこなわれている。

しかし、調査結果から見る限りでは道具的な援助が近隣や親族から与えられているとはいえ、高齢者をとりまくサポート資源として、友人関係化した近隣・親族との交際が、有効なサポートを提供しうるかどうか、より詳細な検討を必要とする。

### 1. 問題

#### 1. 1 社会関係としての近隣関係

大都市に居住する高齢者にとって近隣関係などインフォーマルな社会関係はどのような意味を持ち、また現実にもどのように機能しているのだろうか。東京都北区桐ヶ丘地区（都営住宅団地）および滝野川・西ヶ原地区（既成住宅地）における調

査データからこの問題を考えるのが本稿の目的である。

まず、近隣関係をどのようにとらえることができるか、その簡単な検討からはじめることにしよう。近隣関係や近隣集団は、住居の近接性や地縁を契機に形成される社会関係、社会集団であることは論を待たないところである。町内社会を単位として全戸の自動的加入を原則とし、包括目的の近隣集団として町内会・自治会があることはよく知られているし、そのほかにも年齢階梯的な子ど

\*駒沢大学文学部

も会、青年団、婦人会、老人会なども近隣集団の  
カテゴリーに含まれよう。

こうしたフォーマルな集団の形成とは別の次元  
で地域住民は、その近接する住居に居住する他の  
住民との間に社会関係を形成する。これが近隣関  
係である。しかし、近隣関係は地域住民相互の間  
に均一に形成されるものではない。そこには選択  
性が存在している。もっとも近い距離にある隣家  
ともっとも親密な近隣関係が形成され、それが同  
心円を外周部へ向かうほど疎になるかといえは決  
してそうではない。たとえば町丁目といったよう  
な近隣集団の形成される範囲など、近隣の範囲と  
して前提される地理的・空間的範囲があるのは事  
実であるが、その範囲内においてある住民の周囲  
に同心円的な近隣関係の広がり形成されるもの  
ではない。

ある住民はその生活上の種々の要求をもち、そ  
れに答える近隣住民へ期待をよせる。期待を寄  
せられた近隣住民がその期待に応える可能性を  
有するとき、近隣として関係づけられた社会関係、  
すなわち近隣関係が成立すると考えられるのであ  
る。

ただし、近隣として関係づけられ相互作用の可  
能性がひらかれるまでの選択の過程にはさまざま  
な条件が作用する。生活上の要求の質や内容、相  
手の年齢や性別、家族周期段階など家族的要因、  
階層的同質性／異質性、接触の可能性や頻度、居  
住年数など面識関係の継続期間、近隣集団やその  
他の集団への加入・参加状況などである。さら  
にはフィーリングとでもいおうか、感覚的に気が合  
う／合わないといった心理的要因も作用するであ  
らう。

近隣関係はまずもって住民相互の社会関係とし  
ての性格をもつのであって、そのことを念頭に置  
き、近隣関係の上に成立する交際関係について検  
討を進めるのでなければなるまい。

## 1. 2 都市社会と近隣関係

都市社会という文脈の中で近隣関係をとりあげ  
ようとすると、まず問題になるのは、都市社会、  
それも東京のような大都市において、近隣関係が

存在するかどうかである。L. ワースのアーバ  
ニズム理論の指摘をまつまでもなく、都市社会に  
おいては近隣集団が衰微してその機能を減退させ  
る。同時に近隣関係も弛緩し「隣の人の顔も名前  
も知らない」という個人の原子化状況に代表され  
る大衆社会的状況が現れるとされる。しかし、一  
方では、ワースのような社会解体論的、大衆社会  
論的な仮説に対して多くの実証的な反論もおこな  
われてきた。都市化の進行、都市的生活様式の深  
化にかかわらず、近隣関係は維持・温存される  
というのである。

ここでは、つぎのようなパースペクティブに  
よって近隣関係を問題にしたいと思う。近隣関係  
は個人が形成する社会関係の一部を構成するに過  
ぎない、言い換えれば、近隣関係以外のさまざま  
な社会関係の網の目の中にわれわれは生きてお  
り、その一部として近隣関係があるという視点で  
ある。近隣関係の他にも親族関係、友人関係、同  
僚関係など、種々の契機によって形成された社会  
関係が個人を中心に展開しており、いつ、どのよ  
うな場面で、どの関係を動員・活性化させるのか、  
その相対的なチャンネルの選択が問題となる。

都市的生活構造論では、ここで述べたような諸  
社会関係を社会財とよび、個人がその生活上の必  
要に応じて社会財を整序化するパターンが都市生  
活者の生活構造の主要な要素として抽出された。  
このように、社会財と呼ばれる諸社会関係は、個  
人が生活上必要とする種々の要求（生活課題）を  
処理・解決するために動員可能な資源の一部を構  
成している。したがって、社会財＝諸社会関係は  
個人を支援する資源（＝サポート資源）としての  
意味をもっていることになる。

サポート資源としての社会関係は潜在的な可能  
性として個人が所有するものである。われわれが  
注目するのは、潜在的可能性としての社会関係で  
はなく、実際のサポートがどのようにおこなわれ  
るのかである。社会関係が活性化・動員され、サ  
ポートという行為がおこなわれる局面をここでは  
「交際関係」と呼んでおこうと思うが、この交際  
関係に注目するのである。

血縁・地縁などよりも学校の同窓や関心の共有

が社会関係の成立契機として重要性を増しているといった、社会関係そのものの成立契機の問題、動員される資源が親族関係や近隣関係から友人関係へシフトしているという生活課題ごとにどのような社会関係が動員されるかというチャンネル選択の問題、とりわけ友人関係に顕著な地域を越えた社会関係の拡大など、現代都市において社会関係をとりあげる際の論点はさまざまである。しかし、高齢者を対象にその近隣関係を主題としてとりあげようという本論にとっては、潜在的可能性としての社会関係よりはむしろ、その顕在化としての「交際関係」に焦点をあてるのが適当なのである。

### 1. 3 高齢者社会の近隣関係・交際関係

近隣関係に大きな関心が寄せられたのは60年代から70年代にかけてのコミュニティ形成にかかわる議論であったといつてよいだろう。国民生活審議会調査部会の報告書『コミュニティ生活の場における人間性の回復』（1969年）がコミュニティ形成の論議の嚆矢となったのは周知の通りである。高度経済成長期、急激な都市化によって成立した大衆社会的状況下では、旧来の地域共同体が衰退・解体し、同時に大都市の急激な膨張によって生じた大都市郊外のアノミックな地域社会があった。そのような状況下で地域住民＝市民を主体として新たな地域社会＝コミュニティを形成することが企図される。自治体行政への参加の契機をつくりだし、住民が地域課題の解決へ主体的に取り組む基盤を形成しつつ、地域社会を人間性回復の場として機能回復させることを期待するものだった。

こうしたコミュニティ形成の論理はこんにちでもその意義を失ったとはいいがたい。しかし、たとえば個人の社会財整理における重点が近隣関係や親族関係から友人関係へとシフトしている現実や、友人関係が地域を超越して拡大している現実など、70年代のコミュニティ・パラダイムに変更を迫るような社会的現実が休まず展開してきていることもまた事実である。

高齢化が急速に進んできていることも、コミュ

ニティを考える際に看過できない現実的問題である。端的には高齢者を対象とする地域福祉の問題が課題として浮かび上がってくる。福祉コミュニティの形成が、一般的なコミュニティ形成の議論の延長線上に登場してくる文脈も、このように理解することが可能である。

では、こうした高齢化の進展する中でどのように近隣関係あるいは交際関係をとらえる必要があるだろうか。既述の通り、近隣関係は社会的なサポート資源としての意味を持っている。いうまでもなく、これは高齢者にとっても同様である。だから、高齢者が必要とする種々のサポートを実現する可能性として近隣関係がますます重要性を帯びてくる。したがって、近隣関係が高齢者をどのようにサポートできる可能性をもっているのか、サポートの内容を明らかにしていくことが必要となる。

注意しておかなければならないのは、高齢者が必要とするサポートは高齢者とその家族がおかれた状況によってさまざまであること、サポートの供給源は近隣のみではないことなどである。とりわけ、公私分担の原則からしても近隣が供給できるサポートの内容はかなり限定されたものとならざるをえないことである。有力なサポート資源として近隣関係に過大な期待を寄せることは慎まなければならぬ。

では、都市に居住する高齢者の近隣関係・交際関係を調査・分析する目的はどのあたりにあろうか。第一には、高齢者に対するサポート資源の一部としての近隣関係が、現実にとどのように形成されているのかを明らかにすることがまずあげられよう。第二には、そのサポート資源が実際にどのように使われているか、つまり、どのような内容の交際関係を生んでいるのかを明らかにすることがある。さらに第三には、高齢者のおかれたさまざまな条件が近隣関係の形成や交際関係の行使にいかなる影響をおよぼしているかを明らかにすることがある。

## 2. データと分析の方針

### 2. 1 データ

本稿で用いるデータは、東京都北区桐ヶ丘地区（都営住宅団地）および滝野川・西ヶ原地区（既成市街地の住宅地）において実施した標準化調査から得られたものである。この調査は、1990年に実施された。対象者は両地区に居住する65歳以上の高齢者であるが、大都市高齢者の「住み続け」の条件を探るといふ調査の目的から、住民票上の居住年数が5年以下および25年以上両住民層を対象としている。有効回収数は桐ヶ丘地区97、滝野川・西ヶ原地区172であった。居住年数ごとの回収数は表1に示すとおりである。

本稿では、25年以上居住する対象者から得られたデータのみを使用する。その理由は二つある。第一には、近隣関係・交際関係じたいの分析をおこなおうとする今回の研究においては、対象者が一定量の近隣関係・交際関係をもっていなければならない。近隣関係・交際関係の量は居住年数と強い相関をもっているという従来の知見にしたがって、25年以上居住層を取り上げるのである。

もう一つの理由は、技術的問題で、桐ヶ丘地区での5年以下居住層が13ケースと少数であり、統計解析に耐えるだけのサンプル数を満たしていないからである。

### 2. 2 分析に用いる変数

今回の調査では、高齢者を取りまく社会関係をとらえるために、実際に交際がおこなわれている

表1 調査地区ごとの有効回収数

単位：人(%)

桐ヶ丘地区		
	5年以下	13 (4.7)
	25年以下	84 (30.1)
滝野川・西ヶ原地区		
	5年以下	62 (22.2)
	25年以下	120 (43.0)
合計		289

近隣や親族に関する情報を集めるかたちで調査票を設計した。つまり、相互作用の可能性としての近隣関係や親族関係を直接調査するのではなく、近隣や親族との交際関係を測定した。

交際関係に関する調査の内容は、具体的には次の通りである。

- 1) 「親しく交際している近隣(親族)」の人数(近隣・親族交際人数)。
- 2) もっとも親しい近隣(親族)についてその交際内容(9項目)。
- 3) 接触頻度(電話による接触の頻度、直接会う頻度)。
- 4) 交際内容9項目のうち、いくつの交際内容を実行しているか(交際量)。

さらに、2)を操作することによって次の変数を作成した。

これら4変数が主として分析の対象となる変数である。

### 2. 3 分析の方針

分析は、桐ヶ丘地区、滝野川・西ヶ原両地区の比較からはじめたい。すでに述べたように、桐ヶ丘地区は都営の集合住宅団地であり、滝野川・西ヶ原地区は既成市街地内の一戸建て住宅を中心とする住宅地である。対象者の居住年数は25年以上にすでに限定されているが、住宅の条件や階層、家族状況などは大きく異なると考えられる。こうした基礎的条件の比較、およびこうした要因と近隣関係・交際関係との関連について比較しておきたい。

第二には、近隣との交際関係について、親族との交際関係と比較しつつ、その特性を把握することである。交際内容、交際量の調査地区別および近隣、親族別の比較をおこなう。また、接触頻度と交際内容の関連についても言及することになる。

表2 性別・年齢・家族構成・健康状態

単位：人（％）

		桐ヶ丘	滝野川 西ヶ原
性別 (*)	男	30(35.7)	59(49.2)
	女	54(64.3)	61(50.8)
年齢 (N.S.)	60歳代	29(34.5)	45(37.5)
	70歳代	44(52.4)	58(48.3)
	80歳以上	11(13.1)	17(14.2)
家族構成 (***)	単身	21(25.0)	13(10.8)
	夫婦のみ	37(44.0)	42(35.0)
	核家族	17(20.2)	27(22.5)
	三世帯	3( 3.6)	33(27.5)
	その他	6( 7.1)	5( 4.2)
健康状態 (N.S.)	健康	35(41.7)	52(43.3)
	普通	42(50.0)	63(52.5)
	寝込みがち	4( 4.8)	5( 4.2)
	寝たきり	3( 3.6)	—( —)

注) カッコ内は $\chi^2$ 検定の結果

\*\*\*; p&lt;0.01 \*\*; p&lt;0.05 \*; p&lt;0.1

### 3. 分析

#### 3. 1 調査地区の比較

今回の調査結果から、桐ヶ丘地区と滝野川・西ヶ原地区を対比しつつ両地区に長期間居住する高齢者の特徴を明らかにしておきたい。

表2には、回答者の性別、年齢、家族構成、健康状態を示した。桐ヶ丘地区ではサンプルの6割以上を女性が占めている。年齢構成ならびに健康状態は両地区での大きな差はない。大きな差があるのは家族構成である。桐ヶ丘地区では単身が4分の1を占めているが、滝野川・西ヶ原地区では1割強であり、都営住宅において単身世帯の多いことがわかる。夫婦二人のみの世帯も桐ヶ丘地区が多くなっており、桐ヶ丘地区では高齢者のみの世帯が多くなっている。これに対して、滝野川・西ヶ原地区では三世帯同居の世帯が多く、家族状況に明確な相違のあることを示しているといえよう。

表3 居住年数と出生地

単位：人（％）

		桐ヶ丘	滝野川 西ヶ原
現住所	25—30年	32(38.1)	5( 4.2)
	30—39年	52(61.9)	34(28.3)
	40—39年	—( —)	48(40.0)
	(***) 50年以上	—( —)	33(27.5)
東京 (***)	30—39年	12(14.5)	4( 3.3)
	40—49年	19(22.9)	18(15.0)
	50年以上	52(62.7)	98(81.7)
出生地 (***)	北区内	1( 1.2)	26(21.8)
	23区内	24(28.6)	30(25.2)
	都下+3県	7( 8.3)	13(10.9)
	その他	52(61.9)	50(42.0)

注) カッコ内は $\chi^2$ 検定の結果 \*\*\*; p<0.01

表4 収入（年収）・学歴

単位：人（％）

		桐ヶ丘	滝野川 西ヶ原
収入（百万円）	～2	42(50.6)	46(44.7)
	2～3	25(30.1)	25(24.3)
	5～7	2( 2.4)	11(10.7)
	7以上	1( 1.2)	6( 5.8)
学歴 (*)	尋常小学校	15(18.1)	17(14.2)
	高等小学校	30(36.1)	37(30.8)
	旧制中学	32(38.6)	42(35.0)
	旧制高校・大学	6( 7.2)	24(20.0)

注) カッコ内は $\chi^2$ 検定の結果 \*; p<0.1

すでに述べたように、今回の調査対象者は年齢と居住年数を層化して、25年以上居住する高齢者層から抽出したものである。しかし、25年以上の居住歴をもちながらも細部を見ていくと、居住年数は桐ヶ丘地区と滝野川・西ヶ原地区では分布の状況が大きく異なることがわかった(表3)。現住所での居住年数は桐ヶ丘地区は団地の建設時期もあり最長でも40年に満たない。それに対して滝野川・西ヶ原地区では40—49年層が4割、50年以上の居住者も4分の1以上に達している。

また、東京での居住年数も、全体として長期間にわたっており、両地区を比べるなら滝野川・西ヶ

原地区の方がより長いといってよい。50年以上の居住者は桐ヶ丘地区で62.7%、滝野川・西ヶ原地区で81.7%にのぼっている。

さらに出生地であるが、これも両地区の違いが大きい。相対的には、桐ヶ丘地区では東京以外の出身者が多く、滝野川・西ヶ原地区では東京出身者が多いということになる。特に、滝野川・西ヶ原地区で北区内を出生地とする対象者が26名(21.8%)にのぼり、うち8名は現住地で生まれたものである。

次に階層を示す変数をふたつとりあげてみよう(表4)。ひとつは収入(年収)である。これは、回答者個人ないしは回答者夫婦の年収を質問したものである。桐ヶ丘地区と滝野川・西ヶ原地区との差はさほど大きくないが、300万円までの所得階層が桐ヶ丘地区では80%強を占めるのに対して、滝野川・西ヶ原地区では70%弱である。また、500万円以上の所得階層は桐ヶ丘地区で3.6%、滝野川・西ヶ原地区では16.5%であった。ふたつめは学歴である。顕著な差が見られるのは旧制高校・大学という高学歴層が滝野川・西ヶ原地区で20%を占める点であろう。

以上を要約しておこう。家族構成において都営住宅団地の桐ヶ丘地区と一戸建てを中心とする滝野川・西ヶ原地区では大きな相違があった。桐ヶ丘地区では単身および夫婦のみの世帯をあわせるとが70%近くに上る。滝野川・西ヶ原地区では半数弱である。これに対して3世代同居の世帯が桐ヶ丘地区では3世帯と少数であり、滝野川・西ヶ原地区の33世帯、27.5%と大きなひらきがある。これは住居の条件が大きく作用しているものと考えることができる。

また、居住年数、出生地など居住歴にも相違がある。両地区とも東京を出生地とする対象者が多いが、特に滝野川・西ヶ原地区では北区を含む東京23区内の出身者が5割近くあり、東京での居住年数も50年を越える対象者が8割以上となっている。

年収と学歴から判断する限りでは、社会経済的地位は桐ヶ丘地区でやや低く、滝野川・西ヶ原地区においてやや高いといえよう。

表5 交際人数

## (1) 近隣

	単位：人 (%)	
なし	22 (26.8)	48 (40.3)
1～3人	33 (40.2)	36 (30.3)
4人以上	27 (32.9)	35 (29.4)
合計	82	119

注)  $\chi^2$ 検定の結果 N.S.

## (2) 親族

	単位：人 (%)	
なし	25 (30.5)	12 (10.0)
1～5人	46 (56.1)	80 (66.7)
6人以上	11 (13.4)	28 (23.3)
合計	82	120

注)  $\chi^2$ 検定の結果； $p < 0.01$ 

## 3. 2 近隣交際人数と交際内容

## (1) 近隣交際人数

はじめに社会財としての近隣関係が実際に行使される量(近隣との交際関係量)はどのようにになっているのか検討しよう。

調査では「親しくつきあっている近所の人」の人数をたずねている。この回答をまとめたものが表5である。これによれば、滝野川・西ヶ原地区よりも桐ヶ丘地区の方が近隣との交際関係量が多いように思われる。しかし、カイ二乗検定の結果では調査地区と近隣交際量の間に関連をみることはできない。

## (2) 近隣との交際内容

次に、近隣および親族との交際内容である。これは、「親しくつきあっている近所の人」と「親しくつきあっている親戚の人」それぞれ3人を対象者にあげてもらい、ひとりひとりについて質問として用意した9つの項目(交際内容)から、実際におこなっているものを回答してもらった。表6に示したのは、「親しい近隣・親族」として各3人ずつあげてもらったうちの、回答者(対象者)が第1番目にあげた人(もっとも親しい近隣・親族)との交際内容を集計したものであり、当該の交際内容について「している」の比率(%)のみを表

表6 交際内容

	単位：%			
	近 隣		親 族	
	桐ヶ丘	滝野川・西ヶ原	桐ヶ丘	滝野川・西ヶ原
イ. 一緒に買い物、散歩	46.7	25.7	31.0	13.9
ロ. 一緒に旅行や行楽	41.7	37.1	41.4	28.7
ハ. 一緒に食事やお茶	75.0	51.4	72.4	53.4
ニ. 健康や医者の話	75.0	52.9	62.1	44.4
ホ. 人間関係の相談	26.7	24.3	17.2	27.8
ヘ. 自分や夫婦の将来	35.0	22.9	27.6	23.1
ト. お使いや用事をしてもらう	28.3	8.6	10.3	5.6
チ. 家事を助けてもらう	1.7	—	1.7	—
リ. お金の貸し借り	1.7	—	5.2	2.8

注) 各交際内容について「している」の比率(%)のみを表示

示した。

はじめに、近隣との交際内容である。近隣との交際内容については、ほぼ3群にまとめることができよう。第1群は「一緒に食事をしたりお茶を飲んだりする」「健康や医者のお話をする」の2項目で構成される。両項目とも桐ヶ丘地区では75%、滝野川・西ヶ原地区では50%強が近隣との交際内容としてあげている。第2群は「一緒に買い物や散歩に出かける」「一緒に旅行や行楽に出かける」「人間関係で悩んだときに相談する」「自分や夫婦の将来について話す」「ちょっとしたお使いや用事をしてもらう」の5項目から構成される(滝野川・西ヶ原地区では最後の「お使いや用事」はこの群に含まれず、次の3群に含まれると考えた方がよい)。桐ヶ丘地区では「している」の比率が高いもので46.7%、低いもので26.7%である。これが滝野川・西ヶ原地区ではやや低くなり、37.1%から22.9%である。第3群は「掃除、洗濯、食事の世話などの家事をしてもらう」と「ちょっとしたお金の貸し借りををする」の2項目(滝野川・西ヶ原地区では「お使いや用事」を含む3項目)であり、ほとんど実行されていない。

ここからふたつのがいえよう。第一には、個々の交際内容がどれほど実行されているかという点から見る限り、その比率が桐ヶ丘地区の方が全体として高くなっており、滝野川・西ヶ原地区のよりも桐ヶ丘地区の方が近隣との交際が活発で

ある。第二には、高い比率で実際にとりおこなわれている交際内容と、そうではない交際内容に明確に分けることができたのは、近隣との交際は内容的にかなり限定されたものになっているということであろう。

### (3) 親族との交際内容

次に親族との交際内容である。もっとも実行率が高い項目は、近隣の第1群と同様に「一緒に食事をしたりお茶を飲んだりする」「健康や医者のお話をする」であった。これは桐ヶ丘地区、滝野川・西ヶ原地区に共通しているが、桐ヶ丘地区での実行率は75%、滝野川・西ヶ原地区では60~70%程度と若干の相違がある。第2群以降は、桐ヶ丘地区と滝野川・西ヶ原地区では多少内容を異にするようである。

桐ヶ丘地区では、第2群として「一緒に買い物や散歩に出かける」「一緒に旅行や行楽に出かける」「自分や夫婦の将来について話す」の3項目が実行率40%から30%程度である。第3群としては実行率10~20%の2項目、「人間関係で悩んだときに相談する」「ちょっとしたお使いや用事をしてもらう」がある。第4群は実行率が大変低い2項目「掃除、洗濯、食事の世話などの家事をもらう」と「ちょっとしたお金の貸し借りををする」である。

滝野川・西ヶ原地区では第2群として実行率20%ないし30%程度の3項目があげられよう。「一

一緒に旅行や行楽に出かける」「人間関係で悩んだときに相談する」「自分や夫婦の将来について話す」である。第3群は「一緒に買い物や散歩に出かける」「ちょっとしたお使いや用事をしてもらおう」「掃除、洗濯、食事の世話などの家事をもらおう」「ちょっとしたお金の貸し借りをする」の4項目で構成される。このうち、「一緒に買い物や散歩に出かける」は13.9%とやや高率であるが、それ以外はほとんどおこなわれていないといつてよい範囲である。

親族との交際内容についても、近隣とはほぼ同様の指摘ができる。すなわち、交際は滝野川・西ヶ原地区よりも桐ヶ丘地区において活発である。また、交際内容もまんべんなく交際がおこなわれているというよりも、内容じたいが選択されている。

### 3. 3 交際量

次に検討しておかなければならないのは、交際量である。交際量の算出は、交際内容と同じ質問項目を使用している。つまり、9つの交際内容の

表7 交際量の比較 (T-検定)

#### (1) 近隣

	平均値	n
桐ヶ丘	2.369	84
滝野川・西ヶ原	1.300	120

T-検定の結果； $P < 0.01$

#### (2) 親族

	平均値	n
桐ヶ丘	1.857	84
滝野川・西ヶ原	1.825	120

T-検定の結果；N. S.

項目のうちいくつかの項目を近隣または親族と実行しているかを計算したものである。これも交際内容と同様に3人以内であげてもらった「親しい近隣(親族)」のうち、第1番目にあげた近隣(親族)について集計している。

さて、近隣との交際量である。近隣との交際量は桐ヶ丘地区の平均値が2.369、滝野川・西ヶ原地区での平均値が1.300である。これには有意な差が認められた(表7)。また、親族については桐ヶ丘地区1.857、滝野川・西ヶ原地区1.825であり、こちらには平均値に差があるとはいえない。

すなわち、特定の近隣(この場合「親しい近隣」として回答者があげた第1番目の人)との交際が、桐ヶ丘地区において多くの交際内容を含んだものとなっているのである。

### 3. 4 交際頻度と交際関係

#### (1) 交際内容

ここでは交際頻度と交際内容の関係について検討する。交際頻度は、回答者が親しくつきあっているとして第1番目にあげた近隣および親族について、電話で話しをする頻度と実際に会う(面会)頻度の2つをとりあげ、交際内容とのクロス集計を試みた。

最初に桐ヶ丘地区である(表8)。桐ヶ丘地区では、近隣、親族ともに実際に会う(面会)頻度と有意な相関は見られない。近隣については、「一緒に買い物や散歩をする」と「一緒に旅行や行楽に出かける」の交際内容2項目について電話をする頻度が高いほど、当該の交際をおこなっている比率も高くなることが確認された。また、親族との交際では、「一緒に買い物や散歩をする」「健康や

表8 交際頻度と交際内容(桐ヶ丘)

	近 隣		親 族	
	電 話	面 会	電 話	面 会
イ. 一緒に買い物、散歩	*(.517)	—	*(.626)	—
ロ. 一緒に旅行や行楽	***(.740)	—	—	—
ニ. 健康や医者の話	—	—	*(-.223)	—
ト. お使いや用事をしてもらう	—	—	*(.911)	—

注)  $\chi^2$ 検定の結果 \*\*\*;  $p < 0.001$  \*\*;  $p < 0.01$  \*;  $p < 0.05$ 、数値は $\gamma$ 係数



表9 交際頻度と交際内容（滝野川・西ヶ原地区）

	近 隣		親 族	
	電 話	面 会	電 話	面 会
イ. 一緒に買い物、散歩	—	—	—	*(.645)
ロ. 一緒に旅行や行楽	—	—	*(.485)	—
ハ. 一緒に食事やお茶	—	—	**(.572)	—
ニ. 健康や医者の話	—	—	***(.659)	—
ホ. 人間関係の相談	*(.525)	—	—	*(.635)
ヘ. 自分や夫婦の将来	—	—	***(.674)	—
ト. お使いや用事をしてもら	—	—	*(.220)	***(.821)

注)  $\chi^2$ 検定の結果 \*\*\*;  $p < 0.001$  \*\*;  $p < 0.01$  \*;  $p < 0.05$ , 数値は  $\gamma$  係数

医者の話をする」「お使いや用事をしてもら」の3項目の交際内容と電話をかける頻度とが関連をもつ。このうち、「健康や医者のお話を」は電話をかける頻度が低いほど、この交際をおこなうという傾向が見られるが、他の2項目は近隣同様に頻度が高いほどこの交際をおこなう傾向が高いという結果である。

一方の滝野川・西ヶ原地区はどうであろうか。表9は滝野川・西ヶ原地区の交際頻度と交際内容について示したものである。近隣については、電話の頻度と「人間関係の相談」が唯一、有意な関連を見せている。電話で話しをする頻度が高いほど相談する傾向がある。親族との交際では、「一緒に旅行や行楽」「一緒に食事やお茶」「健康や医者のお話」「自分や夫婦の将来」の4項目で電話の頻度と交際の有無が強く関連している。いずれも電話の頻度が高いほど当該の交際がおこなわれる傾向にある。面会の頻度との関連では、「一緒に買い物、散歩」「人間関係の相談」「お使いや用事をしてもら」の3項目に注目できよう。いずれも、面会の頻度が高いほど当該の交際がおこなわれる傾向にある。このように、滝野川・西ヶ原地区では、電話・面会の頻度と近隣との交際とは顕著な関連が見いだせないのに対して、親族との交際では電話、面会などの交際頻度と交際内容に関連が見られる。

(2) 交際量

最後に、交際頻度と交際量について検討しておこう。

表10に示したとおり、桐ヶ丘地区では近隣との

表10 交際頻度と交際量

(1) 桐ヶ丘地区

		近隣交際量	親族交際量
電話	高	4.053	4.000
	中	3.900	2.833
	低	2.714	2.111
		*(.317)	*(.301)
面会	高	3.500	—
	中	3.321	2.500
	低	3.000	2.700
		N.S. (.088)	N.S. (.022)

(2) 滝野川・西ヶ原地区

		近隣交際量	親族交際量
電話	高	2.692	4.000
	中	2.417	2.177
	低	1.969	1.250
		N.S. (.151)	***(.381)
面会	高	2.346	3.250
	中	2.364	4.000
	低	1.955	1.845
		N.S. (.097)	**(.285)

注1) 数値は各カテゴリー内の交際量平均値

注2) F検定の結果 \*\*\*;  $p < 0.01$  \*\*;  $p < 0.05$  \*;  $p < 0.1$ , カッコ内は相関比

交際量、親族との交際量ともに電話で話しをする頻度が高いほど交際量も高くなるという傾向を示している。実際に会う頻度すなわち面会の頻度は、近隣、親族ともに交際量と無関係である。

滝野川・西ヶ原地区では、近隣との交際量は電

話、面接ともに有意な差が認められないのに対して、親族交際量は電話、面会ともに関連があることを示している。電話の頻度が高くなるほど親族交際量も高い。面会の頻度が低い場合には親族交際量も低くなっている。

#### 4. 結果と考察

東京都北区に居住する65歳以上の高齢者を対象とした調査から、親族との交際関係を参考にしつつ、近隣との交際関係について分析をすすめてきた。以下、簡単に結果をまとめ、若干の考察をつけ加えておきたい。

同じ北区内でありながら、社会的環境を大きくことにする桐ヶ丘地区と滝野川・西ヶ原地区では、近隣関係や親族関係を基盤とした交際関係にも相違が見られた。

第一に、交際関係の量的な違いである。近隣との交際関係が活発であることが桐ヶ丘地区を特徴づけている。交際相手の人数は滝野川・西ヶ原地区で「なし」が40%を占め、桐ヶ丘地区では27%程度であるという相違はあるものの、有意な差認められなかった。したがって、桐ヶ丘地区の特徴は、親しくつきあっている近隣とさまざまな内容の交際がおこなわれている、換言すれば交際の親密度がより高いということになる。

一方、親族との交際関係であるが、これは逆に滝野川・西ヶ原地区に特徴がある。交際相手の人数は明らかに滝野川・西ヶ原地区が多いのである。ただし、交際量は両地区に差はない。したがって、滝野川・西ヶ原地区では、多くの親族資源を有しながらも、その交際内容は疎密の差が大きいのではないかと考えられよう。

第二に、交際内容である。おおよそ次のようなことがいえよう。近隣も親族も「家事を助けてもらう」とか「お金の貸し借りをする」など、道具的な内容の交際は親しい間柄でもあまりおこなわれていないが、「お使いや用事をしてもらう」は桐ヶ丘地区では近隣とおこなわれている。逆に、近隣でも親族でもおこなわれている内容としては「一緒に食事やお茶を飲む」「健康や医者のお話をす

る」などが代表的で、情緒的な内容であるといえよう。また、注目できるのは「一緒に旅行や行楽」「人間関係の相談」のように価値や関心の共有をとまなわなければ実行され得ないと思われる内容についても親族ばかりではなく、近隣でも交際の内容として選択されていることである。

近隣も親族も道具的サポートの資源としてはさほど機能しているとはいいがたいが、いわば友人関係にも似た「関心や価値の共有」を前提とする交際内容にまでおよんでいる事実がある。これは、近隣や親族に対する一種の選択が働いていることのあらわれと考えるのもいいかもしれない。つまり、抜け出すことのできない地縁、血縁にもとづく近隣や親族ではなく、一度そうした縁からは自由になった上で、「気の合う近所の人」とか「気の合う親戚の人」が選択されているということである。

第三に、交際頻度の問題に触れておこう。桐ヶ丘地区においては直接会う（面会）頻度が、交際内容とも交際量とも関連をもたなかった。滝野川・西ヶ原地区では近隣との交際は面会、電話ともに接触頻度が影響せず、反対に親族との交際では面会、電話の頻度がともに大きく影響していたのである。

このような調査結果はつぎのようなことを示唆している。近隣との交際といえば、直接相手と会って何らかの相互行為がなされることを通常はイメージしている。しかし、必ずしもこのイメージがあてはまらない近隣の交際があるのではない。

つまり、近隣という住居近接にもとづく交際関係においても、電話というメディアが重要な役割を果たすようになっているのである。もちろん、一緒に買い物や散歩に出かけるとか、一緒に旅行に行くとか、直接会うことなしには成立しない交際がなくなったのではない。その場合にも、出かける約束をしたり、打ち合わせをしたりという場面で電話が活躍していることを想像するに難くない。親族との交際についてもほぼ同様のことがあてはまると考えて差し支えないようである。

最後に、このような結果をふまえて高齢者の交際関係についてふたつの指摘をしておこう。

第一には、先にもふれたように、高齢者の交際関係が選択的な傾向を強めてきているということを確認しておきたい。今回の調査対象は比較的健康に恵まれた高齢者であったが、彼ら／彼女らは選択的な社会関係を周囲に配置しながら独自のライフ・スタイルを形成しているのである。25年以上同じ土地に住み続ける中で、もはや近隣も単なる「近所の人」ではなく、近くに住んでいる「気の合う友人」なのかもしれない。ただし、親族についても同様の傾向が見られ、「気の合う友人」を近隣から選択するか、親族から選択するか、そのあたりに地域性が見られることは注意しておくべきだろう。

また、そうした「気の合う友人」化した近隣が、サポート資源として有効かどうか、議論の余地がありそうである。少なくとも今回の調査では道具的な内容の交際はあまりおこなわれておらず、そうしたサポート資源として活性化している状況は観察できなかったが、それは現状ではニーズをもたないからに過ぎないかもしれない。こうした問題が、今回の調査の不足を補いつつ、今後より深めていかなければならない課題として残されよう。

## 文 献

- 1) Fischer, Claude S. (1982) *To Dwell among Friends : Personal Network in Town and City*, University of Chicago Press.
- 2) Greer, Scott (1956) "Urbanism Reconsidered : A Comparative Study of Local Area in a Metropolis", *Americal Sociological Review*, 21 : 19-25.
- 3) Young, Michael and Peter Willmott (1957・1982) *Family and Kinship in East London*, Penguin Books.
- 4) 倉沢 進編(1990)『大都市の共同生活－マンション・団地の社会学』日本評論社
- 5) 中村八朗(1973)『都市コミュニティの社会学』有斐閣
- 6) 森岡清志(1984)「都市的生活構造」『現代社会学』18, 78-102.
- 7) 森岡清志・中林一樹編(1994)『変容する高齢者像－大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社
- 8) 安河内恵子(1992)「関係の中に生きる都市人－生活構造分析」、森岡清志・松本康(編)『都市社会学のフロンティア2 生活・関係・文化』日本評論社、77-109.
- 9) ワース、ルイス・高橋勇悦訳(1938・1978)「生活様式としてのアーバニズム」、鈴木広(訳編)『都市化の社会学』誠信書房

## Key Words (キー・ワード)

Elderly in Metropolitan Area (大都市高齢者), Neighbor (近隣), Kindred (親族), Social Network of Friends (友人ネットワーク), Mutual Support (相互扶助)

## The Neighborhood Relationship among Elderly Persons Dwelling in Metropolitan Tokyo

Wataru Egami\*

\*Faculty of Letters, Komazawa University

*Comprehensive Urban Studies*, No. 54, 1994, pp. 179—190

This paper is focuses on the neighborhood relationship among elderly persons in metropolitan Tokyo. Generally, neighbors and kindred supplies resources of mutual supports. Is this function applicable to elderly persons? There were two types. People who depends on resources of neighbors lived in danchi area. Another, depends on resources of kindred. But, in both type, we found that elderly persons regard their neighbors and kindred as their friends.

Our social survey was made at Kita-ku, Tokyo in 1990. In our questionnaire, we surveyed the numbers of persons in elderly person's mutual support, and contents and frequencies of it.